

泉鏡花「年譜」補訂 (二十)

吉田昌志

本稿は、先年刊行した岩波書店版『新編泉鏡花集』別巻二(平成十八年一月二十日)収録の泉鏡花「年譜」の補訂で、本誌七九五号(平成十九年一月一日)掲載の「補訂(一)」、七九七号(平成十九年三月一日)掲載の「補訂(二)」、八一九号(平成二十一年一月一日)掲載の「補訂(三)」、八二一号(平成二十一年三月一日)掲載の「補訂(四)」、八二六号(平成二十一年八月一日)掲載の「補訂(五)」、八四三号(平成二十三年一月一日)掲載の「補訂(六)」、八四五号(平成二十三年三月一日)掲載の「補訂(七)」、八五〇号(平成二十三年八月一日)掲載の「補訂(八)」、八五五号(平成二十四年一月一日)掲載の「補訂(九)」、八五七号(平成二十四年三月一日)掲載の「補訂(十)」、八六二号(平成二十四年八月一日)掲載の「補訂(十一)」、八六七号(平成二十五年一月一日)掲載の「補訂(十二)」、八六九号(平成二十五年三月一日)掲載の「補訂(十三)」、八七九号(平成二十六年一月一日)掲載の「補訂(十四)」、八九一号(平成二十七年一月一日)掲載の「補訂(十五)」、九〇三号(平成二十八年一月一日)掲載の「補訂(十六)」、九一七号(平成二十九年三月一日)掲載の「補訂(十七)」、九二七号(平成三十年一月一日)掲載の「補訂(十八)」、九五三号(令和二年三月一日)掲載の「補訂(十九)」に続くものである。

内容は、「誤記・誤植の訂正」、「本文の訂正・追加」、「典拠の訂正・追加」、「新たな項目」の四部に分かち、書式を次の通りとする。

- 一、表記は、原則として右「年譜」に準じた。
- 一、「年譜」本文の後に、【典拠】として、文献の原文、未公開資料の翻字等を示し、典拠が複数の場合は番号を付して併記した。【注記】の項には、内容の解説、考証等を記した。
- 一、引用文の仮名づかいは、原文のままとし、字体は概ね現行の印刷文字に改め、読解に必要なルビを残した。傍点、圏点は概ね原文のままとした。
- 一、引用文の中略部分は、総て「(…)」で示し、前略、後略はいちいち断わらなかつた。引用文の誤記・誤植は、「」内に補正した。
- 一、典拠文献が複数項目に重出する場合も、そのつど項目ごとに示して、書誌的事項の記載を省かなかつた。
- 一、「本文の訂正・追加」では、訂正部分、新たな追加部分に傍線を付して区別した。
- 一、文中の敬称は、原則として省略した。
- 一、必要に応じて、「*」のあとに注記事項を補った。

「本文の訂正・追加」

明治四十五年・大正元年（一九一二） 壬子 四十歳

十月 三十日、午後三時から紅葉館で開かれた紅葉山人十週年忌（会費二円五十銭）において、発起人（鏡花、小栗風葉、徳田秋聲、柳川春葉）を代表し、開会の辞を述べた。巖谷小波の挨拶に続き、松本長の「玉の段」、近藤乾三「忠度」の仕舞、寅千代の歌澤「裏田圃」（紅葉作）、柳家小さん「小言幸兵衛」、柳家紫朝「明烏後の正夢」、野間善左衛門の狂言「かくし狸」、細川風谷の講談「天徳寺の十六羅漢」、町田八熊の芝笛、紅葉館連中の「石橋」等の余興があった。参会者は、石橋思案、泉斜汀、江見水蔭、岡本綺堂、樺島直次郎、木澤敏、小杉天外、後藤宙外、斎藤松洲、武内桂舟、遅塚麗水、角田竹冷、坪谷水哉、塚原波柿園、鰐崎英明、堀野文祿、松井松葉、山中古洞、小波夫人勇子、大橋乙羽未亡人時子、瀬沼夏葉、長谷川時雨、春葉夫人さつ子、春陽堂和田静子、吉原のおなつ等のほか、遺族では未亡人喜久子が、その母堂はな、嗣子夏彦を伴って列席した。発起人のうち小栗風葉は欠席した。

【典拠1】「昨夜の紅葉忌」（読売新聞）大正元年十月三十一日付・五面 *紅葉忌の様」と題する会場内の写真あり。

既報の如く昨日午後三時から芝公園紅葉館に於て紅葉山人十週年忌が営まれた。遅ればせに馳せ参じたる山中古洞君、塚原波柿氏と前後し、「九十九番」目の札を手にして会場にゆけば、泉鏡花君の開会の辞、巖谷小波氏の挨拶も既に了り、催もの松本長の玉の段、近藤乾三の「忠度」寅千代の「歌澤浄瑠璃」紫朝の「明烏後の正夢」紅葉館連中の「小原女」もことすぎて小さんの「小

言幸兵衛」のさなかなり。会衆百余人、何れか当代の名士ならぬはなき中に、塚原波柿氏、巖谷小波氏、江見水蔭氏、石橋思案氏、後藤宙外氏、山中古洞氏、「吉原のおなつ」、小杉天外氏、春陽堂の和田静子、大橋乙羽未亡人、鰐崎英明氏、長谷川時雨女史など列席した。二階の正面に紅葉山人の写真が飾られ、花にかこまれた祭壇は美しくも尚くも築かれて、其大広間の両側と中央の座席に一同居流て折詰に酒を酌つゝ懐旧談、将来談に耽る。それから陶然として野間善左衛門の「かくし狸」、細川風谷の「講談」、町田八熊の「芝笛」、紅葉館連中の鮮かなる「石橋」、ありて賑やかに午後九時半頃閉会した。紅葉山人未亡人と長男の夏彦君の姿晩愁の夜は更けてそゞろにあはれ深し

【典拠2】「昨日の紅葉忌」（都新聞）大正元年十月三十一日付・五面 *祭壇正面の写真あり。

紅葉山人が歿なつてから既う十年、毎年十二月の誕生日に記念祭を開いたのを大正と改まつて其の祥月命日の昨日を紅葉忌として故人在りし日の詩酒徵逐の旧場なる紅葉館に催されたり会するもの百余名皆な是れ故人と誼みありし芸苑の士、午後三時小波氏の開会の辞あつて松本長の『玉の段』近藤乾三の『忠度』の仕舞あり寅千代の歌澤は故人の作を歌ひ小さんの小言幸兵衛の次に紫朝の『明烏』折からの黄昏の雲濤く紅葉時雨にしんみりとした情緒をそゝる食堂二階の正面の祭壇には故人の写真を飾り左右両行浅く酌みしめやかに語りし後野馬吉野の狂言、風谷の講談あり新たに熊本より上京したる町田八熊の芝笛は哀音嫋々聴く人の腸を断つ最後に紅葉館連中の『石橋』あつて九時頃散会したるが尾崎未亡人は遺子夏彦氏を伴ひて出席し其他の女流淑まじやかに居流れしが中に瀬沼夏葉夫人の黒の洋装にて枝珊瑚の長やかなる頸飾りを二重に綾どつて華やかに懸けたるは殊に人の目を惹きぬ祭壇に燃やされたる大なる絵蠟燭は故人生前の愛読者たりし由縁ありとて酒田の菊地あ

や子といふ未知の人より贈り来りしものとぞ美人お夏の再び新たに此館に還りて此の日の席上に幹旋したると共に故人の霊の知るあらば微笑むなるべし

【典拠3】「秋悲し紅葉忌」(「時事新報」大正元年十一月一日付・六画)

毎年硯友社の諸氏によりて催さる、故尾崎紅葉氏の紅葉祭は満二年間打絶え居たりしが本年は恰も満十週年に当れるを以て泉鏡花、徳田秋聲、「小栗風葉、柳川春葉諸氏等各門下の人々主催となりて三十日午後四時半より芝公園紅葉館にて其の紅葉忌を営みたり先づ大広間樓上の正面に祭壇を設けて故人の肖像を掲げ左右にダリヤ菊花の挿花咲き乱れたるが燭の火の風にゆらぐもいとどしめやかなりしが是より先き生前故人の好みたりと云ふ玉の段忠度の仕舞歌澤、落語、踊等ありて祭壇の前に晚餐を供し尚ほ余興として狂言、芝笛、踊及び細川風谷の講談等あり午後十時散会したるが当日参会者約二百名に達し尾崎家よりはきく子未亡人、母堂及び令息夏彦氏其他武内桂舟、齋藤松洲、巖谷小波夫妻、江見水蔭、後藤宙外、塚原涉柿氏等なりし

【典拠4】「紅葉山人の十年忌」(「東京日日新聞」大正元年十月三十一日付・七画) *「紅葉忌の祭壇前に座せる三幹事(右より徳田秋聲氏泉鏡花氏柳川春葉氏)」と題する写真あり。活字の大きさは均等とした。

昨日午後三時より芝公園紅葉館に於いて、故尾崎紅葉山人の十年祭を行ひたるが受附には泉鏡花、徳田秋聲、柳川春葉の三幹事(小栗風葉氏欠席)及び泉斜汀等の諸氏ありて来会者の幹旋につとめ定期前よりなか／＼の賑ひにして三時半巖谷小波氏立つて開会の辞を演ぶ「只今迄は紅葉祭といふ事でしたが今年よりは紅葉忌と改めまして且つ幹事も門下生の方々が当る事となりました、且つ今年は故人逝いて十年との事故、盛大にといふ希望もあつたが御大喪の悲しみに会つたので余り騒がぬ程度に致す事にしました」云々直に仕舞松本長の「玉の段」に移り次で近藤乾三の「忠度」あり歌澤の寅千代が

「恋すて」につゞいて「裏田圃」を唄ひ次ぎに踊「小原女」(紅葉館連)新内紫朝の「明鳥」小さんの「小言幸兵衛」ありしが就中「玉の段」は紅葉山人が生前殊に好しものなりと云ひ「裏田圃」は故人の作とて一層の興を増し「玉の段」が故人の技巧を思はしむれば「裏田圃」はよく其風流事を偲ばしむるに余りあり会者等しく故人を偲ぶの情充ち興に酔ひし処にて「階上で食堂を開きます」の案内あり、階上大広間正面の祭壇には故紅葉山人の肖像ありて又一しほに偲ぶよすが、あらしめ配膳の美人お銚子を廻して又一しほに酔はしめたり食事終りて狂言「かくし狸」あり次に故人と中学校時代の同窓なりし細川風谷は壇上に立て「天徳寺の十六羅漢」の一席を終り芝留について再び紅葉館連「石橋」賑々しく散会は午後九時十三分なりき当日来会者は巖谷小波、石橋思案、江見水蔭、後藤宙外、坪谷水哉、岡本綺堂、遅塚麗水、武内桂舟、齋藤松洲、山中古洞、木澤敏、角田竹冷、高木與平、樺島直次郎、堀野文録、松居松葉諸氏等二百名に近く婦人席亦賑ひ巖谷夫人、大瀧夫人、柳川夫人、長谷川時雨等、瀬尾夫人の洋装は殊に目につきぬ俳優連には福島清、川上つる、喜多村緑郎は電報を寄せたり当夜尾崎未亡人菊子に連れられし長男夏雄氏(一一)の成長されしは故人の霊も満足此上の事なるべし

【注記】

「年譜」では典拠1の「読売新聞」および生田葵山宛の開催通知(大正元年十月十二日付葉書、右通知の下書によって記したが、他紙の報を参照し、余興の内容、出席者等を補った。参会者の数と閉会の時刻は各紙の記述が区々なので、記載を控えた。

参会者のうち、著名人や文士以外の人物について略述する。

齋藤松洲(明治三年生、昭和九年歿カ。当年四十三歳)は、本名太一郎、大阪堂島生れ。京都に出て鈴木松年に入門し、松洲と号した。同門上村松園の兄弟子に当る。

のち宇田川文海の養女ふさと結婚。その著『仰山閣画譜』（左久良書房、大正五年七月三十一日）の内藤湖南（署名は「内藤虎」）の序文中に「聞尾崎紅葉晚年尤愛君画。紅葉者近世才人。嘔心著書。布滿世間。豈其才情與君神契耶。」と記される通り、晩年の紅葉と最も親しく交った人物である。

東京に出たのちの画業は、俳画、口絵、挿絵から装丁に及び、装丁家としての才覚は、広津柳浪作『河内屋』（春陽堂、明治三十九年六月一日）の斬新な意匠にも存分に発揮されている。交際が晩年であったため、紅葉の最盛期の著書を担当するには至らなかつたが、明治三十五年の『東西短慮之刃』（春陽堂、一月一日）以下（版元・刊行年月日を省く）、『芝肴』『西鶴文粹』『俳諧新潮』『換葉篇』、歿後刊行の『草紅葉』『煙霞療養』『十千万堂日録』『紅葉遺文』『紅葉短冊帖』等の図案・カット・装丁にとりどり関わっている。

巖谷勇子（明治十二年生、昭和三十年一月七日歿、享年七十八。当年三十四歳）は、近江水口町在住山村徳次郎の末妹。巖谷家の父祖の地水口に住んでいた小波の実姉富森幽香の世話で見合、三十一年六月二十九日に結婚し、四男二女をもうけた。

大橋時子（明治四年九月十七日生、昭和二十年六月二十九日歿、享年七十五。当年四十二歳）は、博文館創業者大橋佐平の長女（長男新太郎の八歳下の妹）。尾崎紅葉の媒酌で、明治二十七年十二月十一日、渡部又太郎（乙羽）と結婚、大橋家に入った乙羽は義兄新太郎を扶けて博文館の編輯を担い、日清戦後の同館の躍進を実現した。結婚間もない二十八年二月、横寺町紅葉宅の玄関を出た鏡花の寄食したのが小石川区戸崎町六十一番地の乙羽宅であった。三十三年三月紅葉から「行く雁の思ひ切りたる高さかな」の餞別句を贈られて欧米漫遊の途に上った乙羽は、帰国後病を得て三十四年六月一日に享年三十三で逝去、時子は前年四月二日に授かった一子佐太郎（命名は祖父にあやかることむろんだが、またおそらく兄新太郎を補佐するといふ自らの役目を長男に託したものであったろう）を育てつつ、戦時中の博文館の存続

に力を盡した。樋口一葉の在世中は、夫乙羽との間に立ってさまざま周旋したことが一葉日記や書簡に誌されている。乙羽の最も囑望していた作家が一葉と鏡花の二人であったことはいふまでもない。

なお、乙羽、時子、佐太郎それぞれの写真は、坪内水哉の追悼文「嗚呼乙羽君」を載せる「太平洋」（二巻二十四号、明治三十四年六月十七日付・三面）の文中に掲げられており、一家の面影を偲ぶよすがとなる。乙羽の肝煎で創刊し、写真の豊富を誇った博文館のグラビア週刊雑誌「太平洋」ならではのレイアウトを示して貴重である。

瀬沼夏葉（明治八年十二月十一日生、大正四年二月二十八日歿、享年四十一。当年三十八歳）は旧姓山田、本名郁子。明治三十一年十二月一日、ニコライ神学校校長瀬沼恪三郎と結婚、「十千万堂日録」によれば、紅葉は三十四年二月十八日に夫の恪三郎からの入門の請を承けて、三月八日にそれまで「桔梗」を名のっていた彼女に「夏葉」の号を与えているから、この時をもって紅葉入門が成ったとしてよいだろう。春葉夫人さつ子（薩子トモ。明治十七年生。当年二十九歳）は、旧姓高久、栃木県生れ。紅葉かかりつけの木澤病院（院長は当日参会の木澤敏）の看護婦をしていた縁で、紅葉歿後の明治三十七年八月二日に柳川春葉と結婚し、一男一女をもうけた。「補訂（十八）」の明治四十三年三月二十三日の項にも記したように、「読売新聞」（明治三十七年六月十日付・一面）の「よみうり抄」に、結婚は鏡花の媒酌による、と報じられた。

和田静子（明治二十四年三月生。当年二十二歳）は、春陽堂創業者和田篤太郎、むめ夫妻の孫（むめの連れ子きんが小林直造と結婚し、静子を産んだ）、跡見女学校卒、明治三十九年十六歳でむめの跡を継ぎ、大正三年一月十九日に博文館館主大橋新太郎の媒酌で今村利彦と結婚、利彦は和田家に入ってこの年から春陽堂を継いだ（披露宴に鏡花が出席していたことは、「補訂（十）」に記した）。

吉原のおなつ、本名小野なつ（慶応三年三月生。当年四十六歳）は、はじめ紅葉館の女中（典拠2に「美人お夏の再び新たに此館に還りて」云々とあるのは、この経歴をふまえたもの）、のちに吉原仲の町の芸妓となった。紅葉と同一歳の彼女は、「金色夜叉」を愛読して同じ仲の町の芸妓おさだ（本名清水さだ）とともに、紅葉鬮原の「金色芸者」として世に知られた。紅葉三回忌の明治三十八年十月には、自らが催主となって、仲の町で紅葉会を挙行し、これに招かれた鏡花は「仲の町にて紅葉会の事」（明治三十八年十二月）に会のありさまを伝えた。歿年は不明だが、鏡花逝去の昭和十四年まで存命していたのは確かで、久保田万太郎に「鏡花先生逝去の報」トたびつたはるや弔問の客引きも切らず、その中に老妓あり、「仲之町にて紅葉祭（マツ）の事」以来のおなつなり」の前書をもつ「しらつゆのむれておなつも泣きにけり」（久保田万太郎句集）三田文学出版部、昭和十七年五月二十五日）の句がある。おなつ、おさだについては、「補訂（十八）」の明治三十六年七月十五日の項に詳しく記した。尾崎喜久子（明治六年九月四日生、昭和二十八年一月二十一日歿。享年八十一。当年四十歳）については、同じく「補訂（十八）」の明治三十九年一月八日の項に記したので御参看いただきたい。

尾崎夏彦（明治三十四年五月二十三日生、昭和十一年四月十一日歿、享年三十六。当年十二歳）は、紅葉歿後の遺族に触れた「文士遺族の消息（中）」（読売新聞）明治四十四年六月九日付・三面）に「芝小学校に在学中」とある。遺族は歿した翌年三十七年に横寺町を引払い、喜久子の実兄樺島直次（二）郎宅（芝区新堀町二十五番地）に居住していたので、会場の紅葉館（芝公園内二十号地）とは至近（直線距離約九七五m）であった。同居していた喜久子の母堂（紅葉にとっては岳母の）樺島はなが直次郎とともに参じたのはこのためであろう。生前の紅葉も、紅葉館での会合が遅くなった時、樺島宅へ泊っている（「十千万堂日録」明治三十四年十二月二日の条など）。

新堀町の家のことは「補訂（十九）」の明治三十六年三月十九日の項に記した。

当日の余興のうち注目されるのは「玉の段」と「忠度」の仕舞であろう。従弟の松本長が舞った「玉の段」は、この二年前の発表「歌行燈」の終局に用いられてあまりにも有名だが、これが「生前故人の好みたりと云ふ」（典拠3。典拠4も同内容）仕舞だった、との報は看過できない。「あまの舞」の予告題をもつ「歌行燈」に、亡き師紅葉の翳が射してくるからである。能楽師恩地源三郎と喜多八の師弟をめぐる物語である本作にさらなる綾を加えるものとして特記しておきたい。

お三重に仕舞を伝授する喜多八のモデルの一人に松本長が数えられることもまた知られているが、「十千万堂日録」によれば、明治三十四年三月十六日、「金色夜叉」の稿を継ぐため訪れた南榎町の鏡花宅で、その夕刻に紅葉と松本長（当年二十五歳）とは対面している。また紅葉は同一歳の観世清廉（明治四十四年七月十七日逝去。享年四十五）とも親交厚く、清廉は第二回の紅葉祭（三十七年十二月十六日）で「弱法師」の独吟を披露している。紅葉と能楽とは決して浅い縁ではなかったのである。この紅葉十年忌の追善余興の部に宝生流の俊英松本長（当年三十六歳）と近藤乾三（同二十三歳）の両名を招いて「玉の段」「忠度」の仕舞を演じさせたこと、諸事もって鏡花の斡旋である公算が大きいといえよう。

大正十一年（一九二二） 壬戌 五十歳

五月 十四日、九九九会の会員とともに、逗子の里見淳宅（白酔亭）に集い、その揮毫帳（「白酔亭宿帳」）に「手にとれば月のしづくや夏帽子」の句を署した。当日はまず夫人同伴で参加、ほかに阿部章蔵（水上瀧太郎）、岡田八千代、久保田万太郎、小村雪岱、鈴木喜代（日本橋檜物町芸妓）らが会した。

【典拠】里見淳「白酔亭宿帳よりその七「九九九会」の人たち」（『私の一』中央公論社、昭和五十五年五月十五日）

今回は「九九九会」の同人七名様おそろひで、「遠路」といふほどでもないが、逗子、田越川ぞひなる白醉亭まで、わざ／＼おこしくださつた折の……今、ふと気づけば、一つ残らず「遺墨」になつてしまつて……。

「九九九会」の謂れ因縁を話すとすれば、この項の二、三回分でもまだ足りまいが、簡単に説明すれば、毎月開かれる集りの会費が九円九十九銭なるに由来することで、日本橋檜物町の待合藤村家を定席としてゐた。で、最初まづ日附を見ると、「大正十一年五月十四日」とあり、半世紀あまりも前のことになる。初筆しよふでの久保田万太郎は、当日の世話人、……「幹事」といふ言葉は、われ／＼の間ではあまり使はれなかつた、……に違ひなく、「附」……これは「つけたり」と読んで貰ひたいが、たぶん自発的に、「なんか用があつたらおれも手伝つてやるぜ」と、水上瀧太郎こと阿部章蔵も轡を並べて踊り出たわけだつたらう。

めつたに他家を訪れたりしない泉鏡花が、なほそれ以上に珍しくも、奥方同伴の遠出で、

手にとれば月のしづくや夏帽子

と、これまた不思議なくらゐる手軽に筆を染めてござる。途中どことやらで俄雨にあひ、買ったばかりのカン／＼帽を、……日時から推してたぶん単衣と思ほしい懷中に捻ぢ込んだとか、同行の若手連に冷かされ、厚ぼつたい近眼鏡の奥で、おどけて、目玉をパチクリさせてゐたつけ。

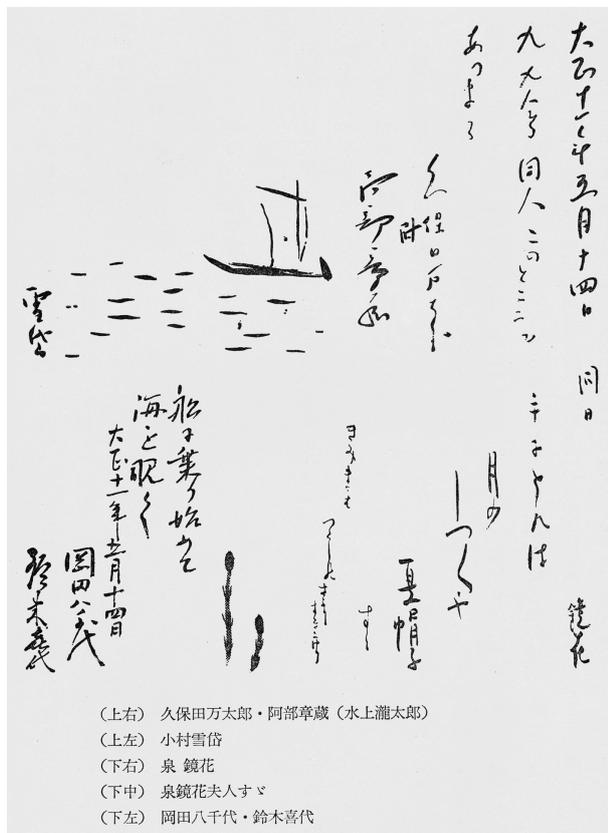
次なる妻女・すゞの自筆はちと読みづらいが……。

きみまてばつくしのたよりすぎにけり

らしい。日露戦争後の数年間、この地に隠棲してゐた頃の実感かも知れない。土筆ン坊は、帆かけ舟と共に小村雪岱の描くところだ。(…)

鈴木喜代は、檜物町芸者の大姫さん株の一人で、永年に亙り、鏡花から云

へば鼻頂、彼女たちからは、崇拜措く能はざる大先生といった、極めて親密なつきあひで、なかんづく喜代は、名作「日本橋」の清葉のモデルといふことに、いつ頃、誰が云ひだしたことやら、まるで既定の事実のやうに取り沙汰されてゐた。



(上右) 久保田万太郎・阿部章蔵(水上瀧太郎)
 (上左) 小村雪岱
 (下右) 泉鏡花
 (下中) 泉鏡花夫人すゞ
 (下左) 岡田八千代・鈴木喜代

「白醉亭宿帳」(『私の一曰』105頁)

【注記】

「年譜」では、「泉鏡花展——水の迷宮——」図録(神奈川近代文学館、平成七年四月二十二日)の写本版にしたがって記したが、その後、真田幸治氏「「雪岱調」の萌芽と挫折——小山内薫「鏡台前」の挿絵」(『Editorship』4、平成二十八年三月二十五日)において、参加者の記載を欠く、との指摘を受けたので、あらためて里見淳の文章を典拠として、参加者を補った。

この逗子の住居については『白醉亭漫記』（新潮社版「感想小品叢書」VI、大正十三年六月七日）に収める諸文に詳しい。

同書冒頭の「引越」には、

この夏まへから尋ねてみると、運よくも、つてがあつて、今までひとに貸したことがないと云ふ、亡つた菊池長四郎氏の建てられた別荘を借りうけることが出来て、右京町の家は貸してつて、私たちは半永久的に逗子へ移つて来たのだ。

とある。「私たち」とは、弴（三十四歳）、妻まさ（二十四歳）、長男洋一（五歳）、次男鉞郎（四歳）、次女瑠璃子（三歳）の一家五人である。銀行家菊池長四郎の歿したのは大正九年八月二十八日（享年六十八）であるから、その翌年に別荘の一棟へ入居したことになる。小谷野敦氏『里見弴伝』（中央公論新社、平成二十年十二月二十日）によれば、この「つて」は里見の「学習院の先輩・岩下家一」であるという。典拠「白醉亭宿帳より」の別の章（その十三松の寿）に、家の様子が、

洒落た母屋とは離して、子女のために建てられた十四、五間もある二階家で、敷地二千坪のうちに、汐入りのと淡水のと、二つも池のある大邸宅を、ちつろん離れの子供部屋だけにしろ、七十円の家賃で借りてゐたわけだが、ちつとも庭づくらず、自生したやうな梅、桜、椿、なかんづく松は、若木まじりに、ひと擁へもある立派なのが亭々と立ち並んでゐた。

と叙されている。

地番は「相州逗子新宿二二三三」（大正十二年版『文芸年鑑』大正十二年二月十日・五版）。従来の年譜（筑摩書房版『里見弴全集』第十巻、昭和五十四年四月十日）では、引越を大正十年九月とするが、「白醉亭の由来」（『白醉亭漫記』）には「十月の二十日に越してから」云々とあるので、月を一と月繰下げるべきであろう。

逗子へ引越す前の住所は、麴町区麴町五丁目十六番地（大正四年十月より）、同区

山元町一丁目七番地（大正五年七月より）、四谷区右京町十三番地（大正七年十二月より）である。逗子転居後、関東大震災で一時麴町区下六番町十番地（鏡花宅の向いの有島本家）へ戻り、弟行郎の赤坂檜町の家の間借りするなどして、大正十三年四月に鎌倉町七〇三、十五年十二月に同西御門六十五番地へと移転した。「半永久的に」（先引「引越」という心づもりは叶わず、震災によってわずか二年間の居住にとどまったのである。

逗子移住に当っては、「異邦の住居」（『白醉亭漫記』）に、

大分以前に、二三年も逗子に住居されたことのある泉鏡花先生が、私がそこへ移ると云ふことを話した時に、二つ三つ注意をしてくだすつたには、——時々東京へ出るやうにしないと、毎日使ふ言葉の数がきまつて了ふ、（…）——これは、書きものでもしよと云ふ人間には、決していゝことではない。それから、たまに東京に出ると、女が馬鹿々々しく綺麗に見える、銀座でも歩いてゐると、のべつ美人に行き会ふやうな気がする、——これもあんまり感心したことではない、と。

と出ている。鏡花の（二度目の）逗子滞在は明治三十八年七月から四十二年二月までの三年半あまりだが、この里見への言葉の通り、週に二日ずつ、月に四度は上京して日本橋春陽堂の「新小説」編輯局へ通っていた（『新小説』明治三十九年一月号の「謹告」。「年譜」に記載済み）ので、その経験に基づく「注意」なのであった。

如上、里見のおよそ二年間の逗子住いは、あたかも転居の前後に当面していた中戸川吉二と吉田富枝との恋愛事件を扱った「おせっかい」（人間）大正十一年一月・三月、「新潮」同年四月）の第五章に、「いろいろの理由から、田舎住居を思ひ立つて、逗子にころあひなうちを見つけ、近々そつちへ移らうとしてゐた昌造」（傍点原文）と出てくるほか、のちの長篇『安城家の兄弟』（中央公論社、昭和六年三月二十日）の「目かくし」の章の冒頭に、

或る銀行頭取の所有で、敷地全体では二十坪からあらうといふ堂々たる別荘の、子供たちとか、出入の人でも滞在させようための、古い、母家に比べればずっと安普請の一棟を、伝手を覓めて貸りうけ、昌造一家の者が、半永久的に住みつくつもりで、この逗子に引き移つて来てから、恰度もうまる一年になった。

とも記されており、「白酔亭の由来」に引く矢野橋村が届けてくれた漢学者近藤先生の七絶も、原文の通り引用されて、作中「白酔亭」の名もそのままに活かされているほど、この二年間の逗子の住居は里見の作品に確と刻まれている。

逗子教育委員会実態調査部編『逗子市誌』第四集（逗子市役所、昭和三十六年三月三十日）の口絵には「里見弴旧宅門」の写真一葉が収められており、「大正初めごろから関東大震災頃まで里見弴は東郷橋の近くに住んでいた。今でも門の屋根うらに「や満乃うち、里見弴」の門札のあとが保存されてある。」（里見弴の本名は山内英夫）との説明がついているが、その後には解体され、現存していない。

なお、「遠くからみた谷崎君」（新潮）四十巻二号、大正十三年二月一日）に、転居する前、「家を探してゐた時に、君の小田原の家が空くと聞いて後を借りる気で見せて貰ひに行つた事がある。その時は丁度留守で会へなかつた」とある。これがいつごろのことなのか、特定できないが、大正十年七月十七日付「読売新聞」（朝刊七面）に「里見弴氏は霎時、都会の塵寰を避けて専念創作に従事す可く、最近小田原なる旧谷崎潤一郎氏宅に転居することゝなつた」（最後の粗酒会）と報じられているから、七月半ばの時点で転居の話は相当に進んでいたごとくである。しかし翌月には「都合で小田原谷崎氏の家への転居を中止し改めて鶴沼方面に新居を求むべく捜索中だ」と（「よみうり抄」読売新聞）同年八月二十日付・朝刊七面）と報じられている。もし話がまとまっていれば、里見一家はいわゆる小田原事件の家（小田原町十字町三丁目七〇六番地）へ移っていたことになる。谷崎は里見の逗子転居

の前月九月に、小田原から横浜市本牧宮原八八三番地へと移っている。当時関わっていた大正活映の撮影所のある横浜に居を求めたのであった。

昭和五年（一九三〇） 庚午 五十八歳

一月 十六日、翌日熱海で開催される紅葉祭（第二回）に招かれて、すぐ夫人同伴で出京し、新玉旅館に泊った。

十七日、熱海梅園の式場に赴き、式典（午後十二時二十分より一時三十分まで）へ参列後に会食、夜七時からの講演会（於熱海園）では、お彼岸の牡丹餅にまつわる紅葉の逸話を語った。ほかに、紅葉未亡人（喜久子）、嗣子夏彦夫妻と江見水蔭も招かれていた。

【典拠1】江見水蔭「熱海の紅葉祭」（騒人）五巻三号、昭和五年三月一日）

『一月十七日』それは尾崎紅葉の『金色夜叉』を読んだ人ならば、直ちに熱海の海岸で貫一お宮血涙の別れを思ひ浮べる——其日を記念し、且つ故人に謝恩するといふので、熱海紅葉会が主催して、毎年祭典が行はれる。それに列席する為には昭和五年の其月其日、朝の七時〇七分に品川駅から汽車で出発した。

当夜講演を依頼されてゐたが、未だ腹案が出来ないので、脳裡でそれを組立てなどしてゐた。然るに大船で茶を買はうとして、図らずも、次の車室に、紅葉未亡人、遺息夏彦夫妻の乗つてゐるのを発見した。

自分は駅に近き品川でありながら、此汽車に乗る為には、可成り早くから起きて支度をした。それが杉並町からと成ると、暗い間から起きなければ間に合ふまい。

『宅から駅までの間を、約束した自動車が来ませんので、已むなく走りましたがイキが切れて困りました』と未亡人は語った。（…）

此行、泉鏡花は家族を連れて昨日先発「。」巖谷小波は差支へが出来て不参。武内桂舟には通知漏れらしかった。

先年熱海へ硯友社同人で一泊旅行をした。その時の石橋思案、丸岡九華、広津柳浪、久我亀石、それだけ既に死んでゐる。それを考へると自分は非常に寂しかった。

九時二十七分、熱海に着いた。有志が三四人出迎へてゐた。駅前には『第二回紅葉祭——謝恩——』といふ布張のアーチなど建てられてゐた。辻々にはポスターが貼られてゐた。煙火が音高く打揚げられてゐた。(…)

自動車で有志と共に式場の梅園に入った。(…)山腹の撫松庵といふ茶屋が休憩所に宛てられてゐたので、それに入った。(…)

其処へ尾崎家の一行と泉鏡花とが、河原井、宋の二氏に案内されて来た。

(…)

すると又変な男が出現して、接待ぶりを始めた。それは十徳を着てゐる中老人だ。何んでも旧派の宗匠らしかった。懐紙に一句認めて、

『どうかお附け下さい』と未亡人の前に提出した。

『そんな事は一切お断りしてあります』

卒直に、痛快に、泉鏡花が断はつた。不断は優しく物柔かに見える鏡花にして此時の勇猛さは、真に頼母しいものであつた。宗匠不承無性に引下つた。

一時過ぎに成つて漸く式が開かれるといふので、迎へが来た。式場は梅園中に紅白の幕で一区画を仕切つて、正面に祭壇が設けてあつた。右側が遺族席並びに硯友社同人席。向側は紅葉会員及び一般会員で、その中には遊湯中のお客で、古い紅葉ファンとも偲ばれる紳士淑女も見受けられた。(…)

先帝曾て御休憩あらせられたといふ茶室風の小亭に一行は入つて、此所で、すし、おでん、甘酒などの御馳走に成つた。

鏡花は寒いので、壇話の酒を茶碗で呷つた。(…)

夏彦は亡父に似ず、少しはイケるやうで、鏡花の相手をしてゐた。自分は詰らないから失敬して、先へ独で宿に帰り、湯に入った。(…)

会の河原井氏が来た。揮毫依頼の数が甚だ少ないと恐縮した。(…)

仕方がない。今更どうにもならないのだ。少数の揮毫を片付けてから、河原井氏と共に七時頃、講演会場の熱海園へ、自動車に乗込んだ。(…)

弁士の控所に入ると、有志の他に鏡花が先着してゐた。誰やら既に開会の辞を述べつゝあつた。

『大変な景気ですが、大向ふの鼻息が荒う御座んす。時間が遅れたので、木戸銭を返へせなんて怒鳴つてゐます』と鏡花は不安らしく訴へた。

『まあ好い。遣つてくれ給へ。君が遣らないと、巖谷の名が出てゐて、其来ないのだから、僕一人では寂しい。是非遣つて下さい』と自分は頼んだ。

鏡花も他の会でなく、恩師の追悼講演なので、度胸を定めて出る事にしてゐた。『例のを頼みますよ』と鏡花は会の宗（宗匠）さんに云つてゐた。例のとは、土瓶に酒を入れて、湯と見せて、それを演壇で呑んでは景気を附ける。これは鏡花一流で、ラヂオの時には此手を行つた。

やがて鏡花は出た。それは非常に珍らしい、而して面白い——型を破つた雄弁法で、例の鏡花式の筆法が話術の上にも現はれて、実に珍重すべき講演であつた。

初めのほどは少しく野次も入つたが、材料が耳新らしいので、後には謹聴した。

お彼岸の牡丹餅といふ逸話で、紅葉の人情味を極説した処などは、満堂をシンミリさした。此間にコップで酒を呷つたのは勿論だが、聴衆に此トリツクは解らなかつた。

此後を継いで自分が登壇した。(…)

自分は翌日の朝早く、丹那の山越をして、沼津へ出て、名古屋の講演及び放送に行かねばならぬので、余興を見残して、徒歩で帰宿。按摩を取らして、入浴後に寝た。

【典拠2】江見水蔭「熱海紅葉祭」『水蔭行脚全集』第六巻、江水社、昭和九年四月十五日)

熱海が『金色夜叉』の為に宣伝されたのを徳として、紅葉祭を催した最初は、昭和四年一月十七日。即ち間貫一がお宮を罵倒して、来年の今月今夜、その月を涙で曇らせる云々のその一月十七日挙行。第一回は差支へて行かず。第二回は、五年一月十七日、巖谷小波は二日遅れて行つた。自分は名古屋から、岐阜県下大井町へ講演の行きがけを、寄る事にした。(…)

品川から汽車、午前七時零七分発。睡眠不足でウツラ〜。大船で隣室に尾崎家の一行が在るのを知つた。(…)

大船で同様に弁当を仕入れたが、それまでにせぬと、午前十時開会といふ通知なので、次の汽車では間に合はぬからであつた。泉鏡花は、前日から細君同伴で先発といふ。(…)漸く一時頃開会と成つて、式場へ行く途中。泉鏡花、悲鳴を揚げて、横飛びに飛んだ。可愛らしい小犬がジャレ掛つたのだ。泉は無類の犬嫌ひ。其理由は。

『犬には狂犬病がある。いくら注射しても、それは絶対安全とは保証が出来ぬ。その犬に咬みつかれると大変だ』といふに有つた。鏡花式、鏡花式。(…)夜は熱海園樓上で講演会。それに舞踊と映画の余興付き。(…)

泉鏡花、最初に登壇。同人の講演なんて珍らしい事で、これも師に対しての謝恩からであらう。如何かと案じてゐるが、どうして〜、なか〜大雄弁。同人が、初めて家庭を持ち、牡丹餅をこしらえて、尾崎家へ持つて行つ

たが、遠慮して先生に上げなかつた。それが為に先生から、お前は師弟の情合を本統に解せない。ウマイ菓子よりも、マツイお前の牡丹餅が食べたかつた、と叱られたといふ実話で、大受け。

其後に自分が登壇して。場所がらでもあり『金色夜叉漫談』無論、受けてゐるのだが、(…)到頭、熱海の悪口まで喋り出して、イカン〜。それか、あらぬか、次の紅葉祭からは、自分にだけ案内状が来なくなつた。

(昭和九年三月三十一日)

【典拠3】「熱海を賑した第二回紅葉祭」(読売新聞)昭和五年一月十八日付・朝刊七面)

【熱海電話】紅葉山人の金色夜叉と因縁の深い一月十七日熱海梅園で第二回紅葉祭が行はれた式場は紅白の幔幕を張り恰も満開の梅花とうつろひ祭壇には紅葉山人の写真を安置午後零時廿分から挙式紅葉山人未亡人令息夏彦氏夫妻江見水蔭泉鏡花両氏紅葉会々員その他有志参列神官の祝詞について未亡人夏彦氏夫妻その他玉串を捧げ午後一時卅分式を終り園遊会を開き引続き余興に移り同町芸妓の手踊り宝探し野外劇等あり園内は人を以て埋まりこの数無慮数千非常な賑ひを呈し夜に入つては熱海園で舞踊と講演の会を催し夏彦氏並びに江見、泉両氏の講演少女数十名の舞踊がありその間火花が打上げられ全町内は終日お祭り騒ぎであつた

【注記】

「年譜」では、自筆年譜の小村雪岱の「追記」と『文芸年鑑——昭和六年版——』(新潮社、昭和六年三月五日)に拠つて「熱海町主催の第二回紅葉祭(於熱海梅園)に出席のため、熱海新玉温泉に赴いた。」と記したが、同時に招かれていた江見水蔭の文二種を見出したので、本文を書き改め、新聞報も補つた。四年を隔てる二つの文は内容の重複するところが多く、引用が煩多になるため、典拠2からは、

鏡花に関する条を中心に引用した。

水蔭文の情報で貴重なのは、鏡花がまず夫人同伴で前日に東京していたこと、夜の講演会での鏡花の話の具体的な内容が判る点である。

「金色夜叉」の熱海梅園の条は、単行本の第七章から八章にかけて、お宮貫一の会話のうちに一月十七日の語が出るのは、初出「読売新聞」の明治三十年二月十八日付（四面）掲載の「（八）の三」である。

熱海の紅葉祭について詳しいのは山田兼次の「紅葉祭」（『続熱海風土記』伊豆新聞社、昭和五十四年十一月三日）である。本文は「熱海で、紅葉を替える最初のつどいは、大正十五年（一九二六）、紅葉の門人江見水蔭を招き、横磯にあった村井吉兵衛の別荘で催されている。」とするのをはじめとして、戦後までの紅葉祭の経緯が述べられている。文中の「門人」は「友人」の誤りだが、本項鏡花水蔭の招かれた昭和五年、および次項の不参だった翌六年についての記述を欠くのは、当人が開催に直接関わっていないためであろう。水蔭文によれば、昭和四年の第一回、翌年の第二回は「熱海紅葉会」の主催であると出ている。

熱海に限らず、逝去の明治三十六年以降大正期まで東京で開催されていた紅葉祭の全体については、現在続稿中の「尾崎紅葉の死―その後―」で検討整理して示すこととし、山田が関与した当地の紅葉祭の年次のみ記せば、昭和十四年、十五年、十六年、戦後では昭和二十一年、二十二年の都合五回を数える。とりわけ二十二年、熱海観光文化協会主催の紅葉祭は、慰霊祭に続き、大野屋旅館で千葉に疎開していた紅葉未亡人と、仲田の常春荘に疎開していた鏡花未亡人を囲み、紅葉山人を偲ぶ座談会が開かれた、というが、大正十五年の最初の集いも含め、委細は今後の調査に委ねたい。

なお、昭和四年の第一回のおりには、「読売新聞」（昭和四年一月十七日付・朝刊七面）に「紅葉山人の恩を／熱海町が偲ぶ会／未亡人初め関係者出席して／けふ村

井氏庭園で」と題し、

『金色夜叉』によつて天下に名をあげた熱海町では、作者尾崎紅葉山人の徳を偲ぶべく、今回『熱海紅葉会』を組織して故人の同町に及ぼした恩恵を記念することに今十七日正午から同町海岸お宮貫一の記念碑に近い村井氏庭園を会場として記念会を開催、来賓として紅葉未亡人、長男夏彦氏を初め硯友社関係の巖谷小波、泉鏡花、江見水蔭諸氏並に出版書肆春陽堂の和田氏、掲載紙読売新聞の諸氏が出席するが、故人を追慕するための多数の町民や浴客等も参集して非常な盛会を極めるであらう、尚同会はことしを皮切りとして毎年のけふ開催することにした

との記事が載っているが、当日の報でもあり、鏡花はじめ、来賓出席者の実態は判らず、開催後の続報（『読売新聞』同年一月十九日付・朝刊四面）には「紅葉未亡人並に長男夏彦さん」、「熱海に住む坪内博士の如きも出席」とあるが、ほかの出席者には触れていない。典拠²によれば、水蔭は欠席である。鏡花の出席については、調査が及ばず、確定できないが、不参である公算が大きい。

以下、鏡花と熱海について、現在までに判っていることを整理しておく。

年譜から熱海行きが確認できるのは、明治三十五年の元旦、伯父松本金太郎との旅の途次である。この旅行に関しては、かつて『新編 泉鏡花集』第五卷（岩波書店、平成十六年三月二十四日）の「解説」にも触れたことがあるが、当年より明治三十八年までのあいだに、「熱海の春」（明治三十五年一月）をはじめ「城の石垣」（同年二月）、「吉浦蜆」（三十六年二月）、「友白髪」（ノチ「道中一枚絵其一」三十七年一月）、「道中一枚絵」（ノチ「道中一枚絵其二」三十八年七月）の五篇の紀行をものしているの、これらを総じて旅程をたどることが可能である。

旧臘三十日に東京して相州酒匂の松濤園に泊り、大晦日は小田原見物ののち箱根へ向い、塔之澤の環翠樓に宿泊、明けて元旦小田原へ下り、俣を備って熱海に

入り、三日ほど逗留後、三島越で東海道へ出て、五日に久能山東照宮に詣で、八日に帰京した、九泊十日間の旅であった。

「熱海の春」は初出「俳藪」(黄一号、明治三十五年一月十九日)の末尾に「二日／鏡花／麥人様」(春陽堂版、岩波書店版の全集ではこの条が省かれている)とあるように、同誌編輯の星野麥人へあてた書簡文で、文中に鏡花手蹟の影印が挟み込まれており、「俳藪」初出文とは異なり「一月二日 豆州熱海／对孝館にて／泉鏡太郎」(この条も同前)と読めるから、熱海到着の翌日の認めであり、宿は「对孝館」であったことが判明する(この経緯については、すでに田中勳儀氏【資料紹介】天理大学附属天理図書館蔵 泉鏡花草稿四種【同志社国文学】六十二号、平成十七年三月二十日、にも報告がある)。

この熱海行きを含む十日間の旅は、上記の紀行にとどまらず、その後の鏡花の小説にも参照しており、旅行から九か月後の「やどり木」(明治三十五年十月)の「三島沼津間」の夜汽車での「紳士」の語りの冒頭に、「一月の半ばのこと」として、

私が学生の頃で、正月のお小遣が少々出来ましたもんですから、函嶺から熱海、三島越をして、三島へ出て、それから静岡へ帰りまして、又東京へ出がけに、久能へまはつて清水港から江尻へ出て、緩り終汽車に乗ったのです。

と、旅程の全体がそのままになぞられているほか、箱根から小田原は「千歳の鉢」(明治三十六年一月)、静岡行きは「婦系図」(明治四十年一月―四月)後編の設定や場面にそれぞれ活かされており、就中、熱海行きを直接反映したのは「わか紫」(明治三十八年一月)の一篇である。

本作は――土地の娘お鶴の危難を救った御曹子が実は盗賊の頭領萬綱であり、一味で地震騒動を起して盗みを働かんとするところ、肺病の療治に来ていた警部長に計略を看破された彼は、自らの眼を潰し、のちお鶴を恋女房として琵琶語り

となり、軽快した警部長夫妻の前に現れる――とのあらすじによっても明らかのように、「黒百合」(明治三十二年六月―八月)をはじめ、賊の登場する「親子三人客」(明治三十五年十月)、「祇園物語」(明治四十四年七月)、「龍膽と撫子」(大正十一年一月―十二年九月)などにつらなる「白浪もの」である。

後半(十二章以下)は警部長秋山保の逗留する旅館伊豆屋の番頭喜兵衛の、秋山夫人蔦子を相手の語りによって、温泉地熱海の景況が活写されており、「白浪もの」であるとともに、地縁からしてほとんど唯一の「熱海もの」となる。

先の三十五年の旅行の元旦から連泊した「对孝館」は、喜兵衛の語りのうちに、然ういたしますと、東の詰で、山に近い对孝館あたりが、右の徳利一件で、地震の源かとも思はれます。

殊にそれ、湯の噴出します巖穴が直き横手にございますんで、ガタリといへば、ワツと申す、同一気の迷なら、真先がけの道理なのでござりますが、様子を承りますと、何、彼処ぢや又、北隣の大島樓が、さきへ騒いだとか申します。(十六)

と出てくる。

对孝館は、もとの名を大光館といい、明治二十九年当時の新聞広告には「弊館熱海第一の源泉にて眺望夏冬共空気宜敷今回湯室蒸室坐敷等清潔に改築し都て丁寧と軽便とを旨とし」(「東京朝日新聞」明治二十九年四月十二日付・六面)云々とあり、斎藤和堂『熱海錦囊』(芹澤政吉、明治三十年八月(刊行日記載なし))の「温泉客舎」の項には、主人名「井坂清四郎」、等級は「一等」と出ている。「新撰伊豆国熱海温泉地明細全図」(明治三十七年十月新刻。『熱海温泉案内』小川徳太郎、明治三十七年十月十日・四版)では、作中に「湯の噴出します巖穴が直き横手にございますんで」とある通り、山側の上町、熱海最大の源泉「大湯」の「北隣」にその位置が確認できる。この地図と照合すれば、「わか紫」の主要な舞台の伊豆屋をはじめ、玉喜屋、

菱屋、大島樓などの湯宿の名はみな架空であることも判る。

もって鏡花は「対孝館」の名のみ實際を写して、地震騒ぎの「源」とし、これを三年前の熱海逗留の験としたのであった。

鏡花夫妻が泊った新玉旅館は、齡龜樓新玉屋と称し明治二十年に創業、館主は浦井龜吉で、「龜吉は初代野田惣八の二男。屋号に「玉」をつけるのは「隱居玉屋」「玉乃井」「角玉」「中玉」など、野田一族が営む旅館のならいである。新玉旅館は南西（正面）に御用邸の緑が広がり、北東に糸川が流れ、南東に海辺を望む位置にあった」（長尾洋子「大正期熱海旅行とその余韻——ある一家の思い出に寄せて」『市制施行八〇周年記念 熱海温泉誌』熱海市、平成二十九年四月十日）。隱居玉屋、玉乃井、角玉、中玉が海岸沿いの浜町にあったのに対し、分けの新玉は糸川に沿った中腹の新宿に四層樓を構えていた。



新玉旅館

日本遊覧旅行社編刊『全国都市名勝温泉旅館名鑑』（昭和五年八月三日）には、館主「浦井いわ」、客室数「五〇」、收容人員「四一六」名、室料四円―七円、内湯「有」と出ている。

新玉旅館の南西の向いにあった熱海の御用邸は、明治天皇の皇太子明宮嘉仁親王（ノチ大正天皇）の避寒のため、明治二十一年九月に起工、翌年に竣工した。四千坪の敷地をもっていたが、関東大震災で破損してから来遊が途絶え、地元の陳情もあって、昭和六年十二月十日をもって廃止が決定し、熱海町へ下賜、現在は当地に熱海市役所が建っている。鏡花が新玉旅館に泊ったのは、廃止決定の前年だったことになる。

紅葉祭の式場となった熱海の梅園は、丹那トンネル東口の丸山の麓に在り、明治十八年横浜の豪商茂木惣兵衛が、二町五反二十三歩を開拓して園庭を造り、翌十九年四月に竣工、二十一年に宮内省へ献納したので皇室附属地となり、これを熱海村のち熱海町が管理した。園内に長與専齋命名の撫松庵（おそらくこれが会食の会場）があって、山菜料理を供す茶亭として知られていた。専齋三男の長與善郎（『わが心の遍歴』筑摩書房、昭和三十四年七月十五日）によれば、茂木惣兵衛に梅園を開くことを勧奨したのが父専齋であったという。

夜の講演会の会場となった熱海園は、前記『温泉旅館名鑑』に、館主「荒木家」、客室数「一五」、收容人員「一一六」、室料五円―七円、内湯「有」と出ている旅館である。

鏡花の講演の内容を伝える典拠²に、「初めて家庭を持ち、牡丹餅をこしらえて、尾崎家へ持って行った」とあるのがいつごろのことなのか分明ではないが、おそらく祖母のきてを東京に迎えた小石川大塚町時代（明治二十八年六月以降三十二年九月まで）ではないかと思われる。紅葉の「十千万堂日録」に残っている明治三十四年から三十六年までを檢めると、毎年春の彼岸には牡丹餅を、秋の彼岸には「萩ノ餅」を作っていることがたしかめられるし、歳末に搗いた餅を取りに来るよう
に伝えた手紙（明治三十年十二月二十八日付の鏡花宛書簡）も存するから、年に三度の餅作りは尾崎家の恒例であった。

なお、他の招待者の当時の年齢は、江見水蔭が六十二歳、紅葉未亡人喜久子が鏡花と同一歳の五十八歳である。

前項、大正改元の年の紅葉十年忌のおり、芝小学校に通う十二歳であった嗣子夏彦は、この年三十歳になっている。熱海紅葉祭の前々日には、巖谷小波の媒酌による菊池幽芳の娘豊乃との結婚が報じられていた（結婚新風景」「読売新聞」昭和五年一月十五日付・朝刊四面）。紅葉祭への参列は新婚早々だったわけである。

人名録（『帝国大学出身名鑑』校友調査会、昭和九年十一月二十五日・第二版）には（□は欠字）、

君は東京府文学者紅葉尾崎徳太郎の長男明治卅四年五月廿日同府に生れ同卅六年家督を嗣ぐ昭和二年東京帝大文学部美学科を卒業後大学院に学び同□年学芸教育委員会嘱託となり尚英文美術年鑑編纂に従事す現時国際連盟協会嘱託たり文芸家協会々員なり、宗教日蓮宗趣味絵画文学、姉彌生（明二九生）は海軍造兵中佐杉山金作に姉三千代は海軍主計中佐横尾石夫に嫁す（『東京市杉並区杉並町天沼二五二』）

と出ており、妻豊乃の項には「明四〇生、小説家菊地幽芳三女、神戸女学院卒」とある。

これに先立つ『東京帝国大学要覧（従昭和二年至昭和三年）』（昭和三年六月二十九日）中、「学生生徒姓名」録の大学院の項には、各氏名の上に研究題目が記されているが、文学部尾崎夏彦は「鎌倉時代ニ於ケル絵画ノ研究」とある。在学中の昭和三年十二月十八日にはJOAKの国際講座で「日本画の海外進出」と題してラジオ出演（放送開始午後七時二十五分。「けふの番組」「読売新聞」同日付・朝刊六面）もしているが、昭和十二年四月十一日に逝去した。

美術研究所編刊『日本美術年鑑 昭和十二年版』（昭和十二年十一月十日）の「物故作家及美術関係者」の項には、

元美術研究所嘱託尾崎夏彦は病気の為昭和九年以来職を退き、平塚海岸で療養中であつたが、四月十一日逝去した。享年三十六。尾崎紅葉の長男として明治三十四年東京に生れ、昭和二年東京帝国大学文学部美学美術史科を卒業、国際連盟協会学芸協力委員会の嘱託となつて英文日本美術年鑑編纂に従事、昭和七年美術研究所に入つて明治大正美術史編纂に着手したが途中病を得て遂に起たなかつたものである。

と記されており、美術研究所（帝国美術院附属）への入所、平塚での病氣療養など、先の人名録以後の履歴に詳しい。

かつて芝小学校卒業後の十五歳当時、母喜久子の言葉を伝える報（忘形見夏彦さんを心配して居る紅葉の未亡人）「読売新聞」大正四年六月二十八日付・四面）に「夏彦は明治学院へ通学して居りますがどうも躰が弱くて困ります。」と懸念していた通り、長男直衛（昭和六年七月二十一日生）、次男伊策（昭和八年六月二十一日生）の二人の男児を遺し、父紅葉の年齢（享年三十七）に一歳及ばずして身罷つたのであった。なお、夏彦は家督を継いだので「長男」と記される場合が多いが、天折した兄弓之助（明治二十六年一月十日生、同十五日歿）があり、正しくは「次男」である。

昭和六年（一九三二） 辛未 五十九歳

一月 七日付「東京朝日新聞」（朝刊七面）の「花下に紅葉祭」と題する記事に、きたる十七日、熱海で開催の紅葉祭へ、紅葉未亡人、嗣子夏彦夫妻、江見水蔭、久保田万太郎らとともに来場の予定、と報じられたが、十六日付同紙（朝刊七面）で「諸氏は何れも都合悪く出席しないのでいさゝかさびしい」との報が載った。

【典拠】「第三回紅葉祭」（『東京朝日新聞』昭和六年一月十六日付・朝刊七面）

第三回紅葉祭は金色夜叉にゆかり深い十七日満開の梅園で紅葉会主催の下に

挙行する本年は紅葉山人の未亡人および嗣子夏彦氏夫妻、硯友社関係の江見水蔭、泉鏡花、巖谷小波の諸氏何れも都合悪く出席しないのでいさゝかさびしい

【注記】

「補訂(十八)」で、七日付の予報の内容を記したが、十日後の続報を見通していたので追記する。前年五年の第二回への出席は「年譜」に記し、今回前項で補正を試みたが、これによって第三回への不参加が確認できた。

【新たな項目】

大正三年(一九一四) 甲寅 四十二歳

十二月二十九日、長田幹彦宛に、留守を詫び、来訪を願う葉書を送った。

大正四年(一九一五) 乙卯 四十三歳

一月二十二日、長田幹彦宛に、翌日の来訪を待つむねの葉書を送った。

【典拠1】長田幹彦宛葉書(大正三年十二月二十九日付) *昭和女子大学図書館蔵。

(表)

市内麴町区飯田町六丁目

三

長田幹彦様

麴町下六番町十一

二十九日 泉鏡太郎

(裏)

昨宵は御珍客実はお心待ちいたし居り候

折からようこそ

おんいで下され候に あひにく

るすにいたし何とも申わけござ

なく候 これにおこり遊ばさず

かさねての御来駕ひとへにおん

待ち申し上げ候

敬具

【典拠2】長田幹彦宛葉書(大正四年一月二十二日付) *昭和女子大学図書館蔵。

(表)

市内麴町区飯田町

六丁目三

長田幹彦様

麴町下六番町十一

二十二日 泉鏡太郎

(裏)

拝啓まことに勝手がましく

失礼おそれ入り候へども久保田

さんよりのおことばにあまへ

申し上げます 明日おひるすぎ

よりごゆつくりお遊びにおいて

下され度 ひとへに御待ち

申し上げます

【注記】

大正三年歳末から翌四年正月にかけての二通の葉書であるが、短信ながら長田幹彦との親交のほどがうかがえる。

典拠2の「久保田さん」は、久保田万太郎のことだと思われるが、彼と長田幹彦との交友がいつから始まったのか、分明ではない。現行の年譜(中央公論社版『久保田万太郎全集』第十五巻、昭和四十三年六月二十五日)では、大正五年「句楽会」

同人としての交際が記されている。本簡は、これより以前に鏡花を加えた三者の交わりが生じていたことを窺わせる資料となりうる。

この当時の「文章世界」所載「現代文士録」(九巻四号、大正三年四月一日)によると、宛先の「麴町区飯田町六丁目三番地」は兄秀雄との同居で、このあと、大正六年(同上「現代文士録」に拠る。以下同じ)には「麴町区富士見町五丁目十九番地」へ移って、秀雄は「本郷区西片町十番地は十九号」へと別居、大正七年には「牛込区神楽町一ノ二」に(秀雄は同前)、八年には「麴町区飯田町三ノ二」へ移っている。大正十一年年頭の「人間」(四巻一号)附録「芸術家名鑑」での住所は「牛込区中町三十一」となっており、九年間に、生れた麴町と隣の牛込の両

昨夜は御珍客の御来り
 誠に下され候生おあひは
 るすよごし何とも申のけ
 おく候うれやかうり遊田
 かきぬこのは来如馬いと
 待ち申さば候
 敬具

典拠1（葉書裏）

郵便はかき
 市内 麹町区 飯田町六丁目
 三
 長田 幹彦様
 二十九日
 麹町区 六番町五
 泉鏡太郎
 送製局刷印 行發省信通

典拠1（葉書表）

好座まこと勝手が早
 先礼おそれ介候も久候田
 さんりのかごはよあま
 し上候 明日おいらさ
 りぶゆつりお遊びにお
 下されをのこ御待ち
 申さば候

典拠2（葉書裏）

郵便はかき
 市内 麹町区 飯田町
 六丁目三
 長田 幹彦様
 二十二日
 麹町区 六番町五
 泉鏡太郎
 送製局刷印 行發省信通

典拠2（葉書表）

区にわたって転居を重ねている。

なお「芸術家名鑑」所載のアンケートでは「好きな自分の作品及他人の作品」の問いに「自作に好きといふほどのものなし、他人のは泉鏡花氏、森鷗外氏、独歩氏、一葉氏等」と答えている。

長田の『青春時代』（出版東京、昭和二十七年十一月十日）は、谷崎潤一郎の「青春物語」（『中央公論』四十七年九号、昭和七年九月一日）発表の四年後、同誌に連載された「わが青春の記」（同誌五十一年四号―六号、昭和十一年四月一日―六月一日）を主体とし、「祇園物語」で終っていたその後を加筆した回想記であるが、谷崎の「青春物語」に鏡花との出会いが記されている（『紅葉館の新年会のこと』の章）のに対し、この新年会（読売新聞社主催の文芸家新年宴会、明治四十五年一月四日）にも出ていた長田の文には、出会いを含めて鏡花のことは書かれていない。

『青春時代』の「跋」には、「滯」（明治四十四年十一月・十二月、四十五年一月）や「零落」（同四十五年四月）の出世作を発表した当時を語って、

今から考えてみると、その時分一作毎に隆々たる名声を高めていた谷崎潤一郎君の、あの耽美的な、絢爛なダイアリズムに対して、これは又多分に感傷を盛つたりリズムらしき相貌を呈した作風であつたので、一種のコントラストとして、過大に評価されたことは事実である。その意味で僕は、たしかにラツキーボーイであつた。

としているが、谷崎の近くにいた今東光は、両人の祇園耽溺時代（明治四十五年四月―六月）のことを、

この二人の当時の新進花形作家は兄たり難く弟たり難いほど人気も伯仲していたが、谷崎はこの旅で長田幹彦が駄目な人間だと見抜いて、肚の中で軽蔑して仕舞った。『十二階崩壊』中央公論社、昭和五十三年一月三十日

とも述べている。自他相俟って当時の長田の姿を映すものであろう。

鏡花が葉書を出した大正三、四年のころは、赤木桁平「遊蕩文学」の撲滅（『読売新聞』大正五年八月六日・八日付・各七面）によって批判を受ける以前、長田が「新進花形作家」として文壇の注目を集め、精力的な活動を展開していた時期である。

先述のように、鏡花と長田との交際の始まりは特定できないが、長田の鏡花に関する文章は、管見次の六篇である。

- (一) 「鏡花氏の『照葉狂言』」『中央文学』四年九号、大正九年九月一日
- (二) 「『照葉狂言』」『新小説 天才泉鏡花号』三十年五号、大正十四年五月一日
- (三) 「照葉狂言」『春陽堂月報』（『明治大正文学全集』第十五回配本分）昭和三年八月十三日
- (四) 「照葉狂言」の展開」『国文学 解釈と鑑賞』八巻三号、昭和十八年三月一日
- (五) 「照葉狂言」『国文学 解釈と鑑賞』十四巻五号、昭和二十四年五月一日
- (六) 「泉鏡花」『文豪の素顔』要書房、昭和二十八年十一月二十五日

題名からも判る通り、「照葉狂言」に関するものが五篇、うち(三)(四)(五)は、(一)の再録で、(六)は四の中より「照葉狂言」の部分を除き、改めて鏡花との交流を物語風に綴った文であるから、実質的には(一)と四の二篇であるといつてよく、長田の鏡花体験は「照葉狂言」の一作に盡きるのである。

右文中「照葉狂言」を知ったのが、(一)では「丁度十七の秋」「或友達からその小説の面白い話を聞かされて」云々とあるのに対し、二十三年後の(四)では「十四年」、兄の秀雄から「照葉狂言」ついでいふのが素晴らしいぞ」と奨められた、として互いに食違いがあるが、(四)に、

私が後年、北海道の凍雪のなかに放浪して、あの旅役者の群に投ずるやうになつたのも、照葉の楽屋の生活が忘れられなかつたからである。さうなると、私の出世作と称せられる「滯」や「零落」が生れたのも、結局は「てりは」

の展開であつたのである。私が夢寐の間にも、鏡花先生のことを忘れ得ないのは、さうした理由からでもある。

と述べているごとく、出世作『藩』や『零落』は長田における「照葉狂言」の「展開」、追体験であり、かつそれが総てであつたことになる。

したがって「私は今でも『照葉狂言』の一卷を捨てることのできないのである」(一)の末尾)し、

私は三万金のあの「鏡花全集」の豪華版も所蔵してゐるが、あれをみるに、今だに、先生の御作を、三分の一ぐらゐしか読んでゐない。此間も小口から読まうと思つて、第一巻から出してきたが、さてどうも恐くて読めない。もしあの中に、ひとつでも二つでも私の氣に入らないものがあつたとしたら、それだけ私は人生的に不幸だと思ふからである。

私は初版の「照葉狂言」ひとつで、もうたくさんである。あれさへもつてゐれば、先生は私の心のなかにいつまでもいつまでも生きてゐて下さるのだ。(四)の末尾)

と書いてゐるのもまた当然であつた。

さらに(六)には、「大正五年の暑いさかりの頃」「九段の靖国神社わき」の長田の自宅(富士見町カ)を訪れ、「四五はいの酒でそろそろご機嫌になつ」た鏡花に、私は十何年来愛読してゐる先生の初版の『^{マユ}照葉狂言』の綴ち本を出してきて、ぼろぼろになつた木版絵のところへ、せめて記念に署名をしていただかうと思つてさし出すと、先生は一言のもとに「長田おべんちやらするねえ。」と私の手から本を払ひ落してしまふ。

という場面の描写もある。春陽堂版『照葉狂言』の色刷木版口絵は鈴木華郵筆の狂言一座の楽屋に小親と貢を写した図である。「大正五年」が正しいとすると、葉書を出したころよりも両者の交際はよほど深まっているといえよう。大正九年発

表の(一)には、「今では鏡花氏とも時々お眼にかゝれるやうな境涯にもなつてゐるので、私はいつか機会をみてその本へ署名をして頂かうとさへ思つてゐるのである。」と記されている。

この他、長田は大正五年の年末に、来日した或る米国人女性(四では「フラウ・何んとかスキー」、内では「フラウ・ロルフス」)から、鏡花をはじめとする日本作家の短篇を翻訳したいという申し入れがあり、英語の堪能な長田を同道して帝国ホテルで面会した鏡花がこれを謝絶した、とのエピソードを伝えている。しかし、吉田遼人氏(第七十二回泉鏡花研究会の「調査報告」資料、令和元年十二月七日)によれば、長田の記述には、時期、人名等、多分に虚構化が施されており、事実は「大正六年一月十七日、シエルコフ夫人の招待を受けた鏡花は、帝国ホテルでの午餐会に長田幹彦とともに出席。同席者は、高浜虚子、シエルコフ氏、磯村春子、帝国ホテル支配人・林愛作とその妻・たか子。この席上で鏡花は、自作が翻訳されることを拒絶した。」とするのが正しいとのことである。時期や人名を改変した虚構化の様相も含め、この件については、同氏の所説が公表されるのを俟って「年譜」に登載したい。

なお、長田は春陽堂版『鏡花全集』出版記念の鏡花会(於紅葉館、大正十四年三月一日)には出席しているが、鏡花逝去後の通夜および葬儀への参列は確認できていない。

大正八年(一九一九) 己未 四十七歳

十二月 十六日に開催された紅葉祭(十七年忌、於紅葉館、午後二時開会)に出席、硯友社同人(石橋思案、巖谷小波、江見水蔭、武内桂舟)の幹事に、門生として星野麥人とともに加わつた。常磐津清子「吉田屋」、錦城齋典山「直助立志伝」、柳屋小さん「鱧鮓屋」、杵屋千代「縁

の調、澤村由次郎・高丸の素踊、「越後獅子」等の余興があった。参会者は、鍋木清方、黒板勝美、高田早苗、出羽海、柳原義光、柳澤保恵のほか、遺族の紅葉未亡人喜久子、次女彌生も列席し、当日の記念に青磁の花瓶が頒たれた。

【典拠1】星野麥人「何とはなく」〔木太刀〕十八巻二号、大正九年一月五日〕

□十二月十六日 晴 四五年ぶりの紅葉祭甚だ盛んなり、会衆柳原義光伯、出羽海、東儀鉄笛、高田早苗、鍋木清方、其他各方面の名士百五十名、幹事巖谷小波、江見水蔭、石橋思案、武内桂舟、諸氏を主動として、旧硯友社の人々に門生よりは泉鏡花氏と麥人と二名加はる、松尾太夫娘清子^(ついで)の常盤津、杵屋女連の長唄、小さんの落語、典山の講談、帝劇の高丸由次郎の踊、館妓の舞踊、等の余興に記念品花瓶を各自に頒つ。

【典拠2】「昨夜の紅葉祭」〔都新聞〕大正八年十二月十七日付・五面〕

一代の文豪を偲ぶ紅葉祭は十六日午後二時から芝の紅葉館で催された、階下の大広間の床に北蓮藏氏の描いた紅葉の肖像を飾り数多の供物を供へてありし日の故人を語り硯友社同人が思ひ出る数々の話にも今更に故人が慕はれる裡に文字太夫の愛娘清子の常磐津「吉田屋」典山の「直助立志伝」小光の「鱈鮓屋」杵屋千代女の「縁の調」等の余興があつて六時から席を階上に変へ巖谷小波氏の丁寧な挨拶があつて宴に移り盃が廻ると澤村由次郎高丸兄弟の「素踊」「越後獅子」が座興を高くして午後十時散会したか発起人の小波水蔭両氏は喜びしげに交々語るやう「十三回忌を打止めにして暫く中絶して居た紅葉祭を今日の十七年忌に開く事になつて年末であるしするので皆さんのお集まり如何かと思はれたが殆ど前例を見ない多数の参会者があつた」のは嬉しい事である祭らるゝ紅葉も地下で何んなに感謝して居るだらう未亡人や娘のやよひさんも言葉で言へない感謝をあ^まの^ま瞼毛^まを^ま湿^ます^ま涙^まで^ま示^まして^ま居^ませう

来会者は高田黒板両博士、唐澤伯、柳澤伯、其他実業文士二百数十名で近來にない盛会でお土産に「此のぬし紅葉山人」と銘した青磁の花瓶が頒られた

【典拠3】写真のキャプション〔万朝報〕大正八年十二月十七日付・三面〕*写真の引用を省く。

尾崎紅葉山人遊いて十七年、それを記念の紅葉祭が、十六日芝公園紅葉館で開かれた、祭壇に山人の肖像を飾つてその前に未亡人や今は海軍将校に嫁いでゐる令嬢が額づいた、高田博士や柳原伯や国民文芸会の一味や、婦人連やが総て百五十名ばかり、巖谷小波、泉鏡花その他旧硯友社同人が幹旋した

【注記】

紅葉の歿後に、その忌日（十月三十日）ではなく、誕生日（十二月十六日）を記念する会として発足した紅葉祭のことは、かつて「紅葉」「以後」覚書（岩波書店版「新日本古典文学大系 明治編 月報」17、平成十七年一月（発行日記載なし））に述べて以後、調査を続け、おりおり本「補訂」にも掲載してきたが、いまだ全容の把握に至っていない。

この会の開催が決定したのは、「補訂（十九）」の明治三十六年十一月四日の項に注記したように、初七日の前夜であったが、「紅葉祭」の名称は翌年の第二回以降に定着したもので、初回は「紅葉会」あるいは「紅葉山人追悼会」とも称されていた。以後、四十一年の第六回まで続いて、四十二年、四十三年は五月の「硯友祭」がこれに代り、四十五年は十月の十年忌と第十回があり、大正四年の第十三回までを確認していたのだが、今回、星野麥人の文を手がかりに、大正八年の第十七回の開催と幹事としての出席を加えることができた。なお回数は紅葉の年忌に合わせて称していたので、必ずしも実際に開催された回数とは一致しないのである。

今のところ、大正四年までの開催が確認できるから、典拠2に「十三回忌を打

止めにして」云々とある通り、大正四年の第十三回以来、麥人が「四五年ぶりの紅葉祭」としているのは間違いではなかった。

参会者の顔ぶれは硯友社の同人、門生はもとよりだが、力士から博士、伯爵まで多岐にわたり、鏑木清方の出席もたしかめられる。典拠2にある「唐澤伯」は人物を特定するに至らなかったため、本文への記載を控えた。当日頒布された「此のぬし紅葉山人」と銘した青磁の花瓶は、のち昭和四年の「紅葉山人二十七年忌記念遺品展覧会」（於三越ギャラリー、会期十一月三十日―十二月六日）のおり、黒須廣吉から出陳されている（同展覧会誌、刊行年月日記載なし）。

なお、それまでの紅葉祭の余興で恒例のごとく講談を演じていた細川風谷（本名源太郎。慶応三年十一月七日生）が、この会の二か月前の十月十八日に、享年五十三で牛込築土八幡の自宅に歿している（「細川風谷逝く」『都新聞』大正八年十月十九日付・五面）。江見水蔭^{（自）}『明治文壇史』（博文館、昭和二年十月二十八日）には、その経歴が、

風谷は杉浦の塾友として先輩で、渡米してカリホルニアの平野を天幕旅行で横断した。其記行を曾て『時事新報』に寄稿した事も有つたのだ。それが石橋思案とは七歳からの仲好しで、尾崎、川上等とも早くから知つてゐたので、帰朝間もなく硯友社の一人と成つたのであつた。

最初、那古素といふ号で、諸雑誌に書いてゐたが、紅葉から風谷と名けて貰つたのであつた。だが文筆よりも口舌の方が達者で有つた。（後年、郵船会社の欧洲航路の汽船事務長に成り、それから新講師として打つて出て、成功した。）

（一）内は原文
と出ている。「杉浦の塾」とは杉浦重剛の称好塾である。風谷歿後の十一月二十日から三日間にわたって有楽座で追善大演芸会が催された（「風谷追善会」『都新聞』大正八年十一月二十二日付・三面）ほど、異色の経歴ながら、演芸界に重んじられた存

在だった。

なお、典拠1の星野麥人の文章については、吉田遼人氏よりご教示いただいた。

昭和十年（一九三五）乙亥 六十三歳

二月 この月、熱海水口園に遊んだ。

十二月 この月、熱海水口園に赴いた。

【典拠】「泉鏡花年譜」の小村雪岱追記（幽幻院鏡花日彩居士七七日記念冊子「私家版」昭和十四年十月二十五日）

昭和十年二月、熱海水口園に遊ばる。五月、修善寺新井に赴かる。十二月、熱海水口園に遊ばる。（…）

昭和十二年一月、「薄紅梅」東京日日新聞に出づ。三月、葉山長者園に遊ばる。同月、熱海水口園に赴かる。六月二十四日、帝国芸術院会員被仰付。十二月、「雪柳」中央公論に出づ。

【注記】

「年譜」では、右の「追記」の内容も取込んだつもりであったが、昭和十年の熱海行きの条を見通していたので、新たに記載する。

典拠は、昭和三年七月までを記した鏡花自筆の「年譜」（改造社版「現代日本文学全集」第十四編『泉鏡花集』昭和三年九月一日）に、昭和十四年の逝去までを小村雪岱が追記して、鏡花歿後「七七日ヲ記念センガタメ旧門下生芝区田村町二丁目十五番地住人寺木定芳ヲ責任者トシテ門下ニ命ジ編マシメテ泉家が三百部ヲ限リ上梓した「非売ノ記念冊子」に収められ、岩波書店版『鏡花全集』巻一（昭和十七年七月三十日）に再録された。

「追記」にも明らかのように、晩年は夫妻で湯治に出かけることが頻りになった。本項ではそのうち、熱海水口園と葉山長者園（昭和十二年三月）について解説する。

熱海の水口園は、日本遊覧旅行社編刊『全国都市名勝温泉旅館名鑑』（昭和五年八月三日）の熱海温泉の部に、館主「水谷良雄」、客室数「三三二」、収容人員「三三三〇」名、室料四円一七円、と出ている。

「熱海と水口園」の葉（架蔵）には「熱海唯一の名園で、町の南方幽邃閑雅の地、園内の面積五千坪、本家の庭園を合せて二万余坪、庭前の大瀧は懸崖より落下し流れて大池となり舟を浮べ釣を垂るゝによく」云々とあり、「駅より弊館まで自動車五分、徒歩二十分」、附載の地図には本館別館棟の他、園内に十棟余りの「温泉附離れ家」の点在している様子が描かれている。

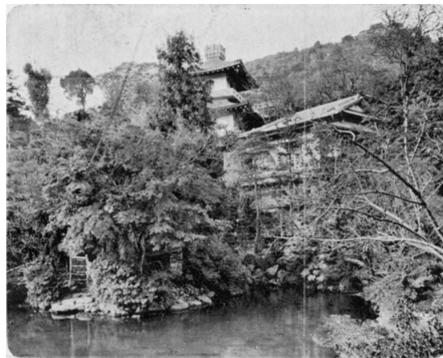
この葉には坪内逍遙の推薦文が添えられており、熱海の町の「現代化」を嘆き、土一升、金一升の譬へなぞは時代錯誤なほどに地ぐらひが騰貴したから、昔の温泉場らしい、広々とした、例へば山が近く、林が深く溪流の水音が雨の声にまがふといふやうな庭を持つて居る旅館などは町本部には一軒もない。ところで、此点に於て、熱海無比を誇り得る旅館は水口園だけである。第一、園内が広くて各種の花木にゆたかであり、その上山が近くて、海が目の下に見え地勢が自然に凸凹して谷めく処もあれば、瀧もあり流れもあり、池もあるいかにも昔の温泉場らしい。論より証拠、一度泊つて御覧なさい、と近所づから提灯を持つ。

と記している。「近所づから」とは、大正九年五月より営んだ逍遙の別荘雙柿舎と水口園とが隣接していたことによる。

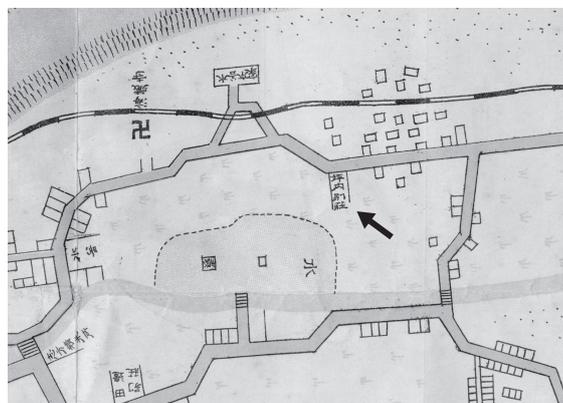
『双柿舎物がたり』（早稲田大学、昭和三十八年二月二十八日）によれば、それまでの海沿いの荒宿から山側の水口村に移って、大正九年二月の別荘建立ののち、馴染の露木館主人、水口園本家の大屋の刀自に諮って、関東大震災後に隣の柴家（東海散士柴四朗の後嗣という）の土地を購入、大正末に水口園から東方の低地の若干を譲り受けて、現在の雙柿舎の敷地四二五坪が成ったのである。

架蔵と同題の熱海市立図書館蔵「熱海と水口園」には、右の逍遙文のほか、近松秋江、加藤武雄、吉川春次郎（医学博士）、結城素明の文を収載、宣伝につとめているが、その最後の与謝野晶子「水口園詠草」五首のうち、

水口の三ところに立つ湯の煙深き木の間の双柿舎の塔
とあるごとく、園内、瀧の落ちる大池からは雙柿舎書屋の塔（昭和三年竣工）を望むことができた。



水口園（「熱海と水口園」より）



神角利三郎「最新熱海案内全図」
（大14・3・25）部分 矢印が坪内別荘

典故とした自筆年譜の小村雪代追記分では、昭和七年（二月）以来、八年二月、九年一月・五月、十年二月・十二月、十一年一月・十一月、十二年三月、十三年四月・九月と、年ごと欠かさず水口園に遊んでいるから、鏡花も逗留のたびにこの景観を愉しんだにちがいない。

葉に載る先引の緒家のほかに水口園への来泊が知られるのは川端康成である。現存書簡から確認できるのは、昭和十四年十一月二十三日（川端秀子宛）と昭和二

十四年六月二十日（林美美子宛）で、この宿泊が「母の初恋」（『婦人公論』二十五年一号、昭和十五年一月一日）、「冬の桜」（『新潮』四十七巻五号、昭和二十五年五月一日。ノチ『山の音』）へと、各々ただちに作品に反映をみている（以上、野末明「川端康成と熱海―その事跡と意義について―」川端文学研究会編「川端文学への視界」二十三号、平成二十年六月二十二日、を参照）。

長者園は、「逗子もの」の代表作「草迷宮」（明治四十一年一月）の冒頭に、

三浦の大崩壊を、魔所だと云ふ。

葉山一帯の海岸を屏風に劃つた、桜山の裾が、見も馴れぬ獣の如く、洋へ躍込んだ、一方は長者園の浜で、逗子から森戸、葉山へかけて、夏向き海水浴のこの時分、人死のあるのは、この辺では此処が多い。

と出ているように、相模湾に突出している「大崩壊」の先端、長者ヶ崎の逗子側の遠浅の浜にあった旅館である。



「相州葉山 大崩の海岸」* 葉山側の遠望



「葉山長者園全景の一」
* 左上は逗子側より見た大崩壊

「風俗画報」臨時増刊「江島、鶴沼名所図会」（明治三十一年八月二十日）の「逗子の部」には、

旅館長者園は眺望最もすぐれたる処に位置を占め、右は葉山の浦里より逗子の出鼻を隔て、鎌倉の山つゞき、七里が浜片瀬までも煙の中に姿を見せ、藍一色に画かれたる江の島は近く白波の末に浮び、左の方洋々たる海上に雲の如く霞の如く見え隠れする伊豆の大島、富岳正面に見えて、真に一幅の画図、誰が見ても好保養地なるを頷くべし。

嘗て東京の有志者兩三名、此の地に遊びて、風光絶美なるを賞し、海水浴場を開かばやと、計画成る、素よりこれ寂寞の浜、纒かに風波を凌げる、漁家三四戸ありしを取崩して、広く地所を購入し、園を結び開館したるは、明治二十年頃なりき、近年葉山に御用邸をしつらはせられ、逗子の地又昔時の逗子ならず長者園も年々浴客の絶ゆることなし。

と紹介されている。

明治二十四年の「読売新聞」（八月十九日付・四面）に載った館主小澤仙太郎の広告には「逗子停車場より南へ一里土地清涼西富嶽に面し海中江の島を望む風景絶美」と出ているが、葉山御用邸の最寄（約七〇〇mを隔つ）であったので、病篤くして大正十五年八月十日に当所へ移った大正天皇の崩御前には、一木宮内大臣はじめ宮内省、政府要人の宿泊所となった。

前記『温泉旅館名鑑』には、館主「酒井晋一」、客室数「一五」、客室畳数「一五〇」、宿泊料三円―七円、と出ている。この当時（昭和五年）の逗子葉山一帯の宿では、かぎや（三三三室、二六三畳、六円―八円）、日蔭茶屋（二五室、二八五畳、五円―八円）、養神亭（三〇室、三六〇畳、四円―六円）に次ぐ規模の旅館であった。

「補訂（十七）」にも記したように、明治三十八年七月二十一日から始まった二度目の逗子滞在において、到着の翌日、すでに日蔭茶屋に遊んでおり、三年前三

十五年夏の一と月足らずの滞在のおりとは異なって、逗子の南の葉山一帯はその生活圏に入っていた。先引のごとく「草迷宮」の冒頭に「大崩壊」「長者園の浜」が描かれるゆえんである。

なお、修善寺温泉の定宿新井旅館については、別に機会を改めて述べたい。

〔付記〕

文中に引用した図版は、長田幹彦宛書簡を除き、すべて架蔵のものによった。

本文中にお名前を記した方々のご教示のほか、資料の調査に関しては、青山学院大学図書館、熱海市立図書館、国立国会図書館、日本近代文学館、のお世話になり、とりわけ長田幹彦宛書簡二通の紹介に当っては本学図書館からご許可をいただいた。近代文庫の利用とともに、併せて深謝申し上げます。

(よした まさし 日本語日本文学科)